

特別支援教育での遠隔講義コンテンツと合理的配慮

企画者	金森 克浩	(帝京大学)
・話題提供者		
司会者	爲川 雄二	(帝京大学)
話題提供者	中野 泰志	(慶應義塾大学)
	新谷 洋介	(金沢星稜大学)
	山崎 智仁	(富山大学人間発達科学部附属特別支援学校)
指定討論者	副島 賢和	(昭和大学)
	梅田 真理	(宮城学院女子大学)

KEY WORDS: 遠隔教育 合理的配慮 オンライン学習

【企画趣旨】

新しい時代に切り替わり教育は情報化されようとしている。また、COVID-19 の影響下で新しい日常が求められ、学校に通学しない学び方も求められている。遠隔学習が広がる中で、オンライン学習などの遠隔講義における障害のある児童生徒の学習参加を保障するためには学習における合理的配慮のガイドラインを作成することが必要だ。大学においては遠隔講義におけるガイドラインの例示はあるが、初等中等教育において、オンライン学習に参加する障害のある児童生徒への合理的配慮は未だ検討されていない。そこで、オンライン学習において各障害別に必要な合理的配慮について話題を提供し、特別支援教育におけるオンライン学習におけるアクセシビリティについて討議する。

【話題提供者の要旨】

(金森克浩)

肢体不自由のある子どもに対してのオンライン学習はインターネット黎明期の 1995 年から進められていた。100 校プロジェクトとして東京都立光明養護学校(現在の光明学園)では、低速のインターネット回線ながら、登校できない生徒への学習支援としてオンライン学習を実験的に行われていた。ここでの課題として、音の遅延と音質の問題があった。肢体不自由児にとっては、通信をする端末のアクセシビリティ機能が重要となるので、対面での学習と同じようにオンライン学習機器の操作性の問題は重要であると考え。また、近年利用が進められているロボットの活用などについても同様のことが課題となるだろう。

(中野泰志)

視覚障害教育では、触察や補助具等の活用が必要不可欠であるため、遠隔支援は、教材等をシェアする情報ネットワークや音声・ビデオ通話を使った遠隔コミュニケーションに限定されてきた。しかし、コロナ禍で遠隔講義を実施せざるを得なくなり、オンラインツールのアクセシビリティと遠隔での新たな指導方法の確立が大きな課題となった。本報告では、「視覚障害学生のオンライン授業を支援する会」や各地域の盲学校等が、幼児児童生徒学生に対して実施してきた実践の概要を紹介し、今後の課題を明らかにする。

(新谷洋介)

聴覚障害児・者に対するオンラインによるコミュニケーション方法について、近年では、技術の向上によって音声認識による自動字幕生成が実用的になったことや、ネット動画配信サービスにおいても、字幕生成が自動化されるようになっている。そして、テレビ会議システムでは、映像による口元や手話、チャット機能による文字、音声認識サービスとの連携による自動字幕生成等が実装され、必要なものを選択して表示させることができるようになった。このことは、オンライン学習をする上で、得意なコミュニケーション方法を選択し利用できることにも繋がるのではないだろうか。

(山崎智仁)

知的障害を対象とする富山大学附属特別支援学校では、2020 年 6 月までの一斉休校の間、児童生徒の学びを止めないため、また家族の困りを改善するために、web 会議アプリ「Zoom」を活用した遠隔授業を各学部合わせて 40 回程度、ならびに動画配信サイト「YouTube」にて限定公開の動画配信を 41 本行った。その際、遠隔授業や動画配信の実施する前に児童生徒と家族に対してニーズ把握、そして休校解除後にも評価アンケートを実施した。本シンポジウムではこの成果と課題を通じて、知的障害児にとってのオンライン学習におけるアクセシビリティのあり方について検討する。

【指定討論者の要旨】

これまでも、オンラインによる学習の可能性についての議論は行われ、数多くの実践もなされてきた。現在の状況において、学習者を主体とした学びの個別最適化の視点から考えると、既存の学校における授業の代替としての遠隔授業では、立ち行かなくなるであろう。それぞれの障害種の子どもたちと実際に関わっている話題提供者の発表を受け、発達障害のある子どもも含めた遠隔講義における合理的配慮について検討し、今後の遠隔教育の可能性について議論したい。

(KANAMORI Katsuhiko, TAMEKAWA Yuji, NAKANO Yasushi, ARAYA Yosuke, YAMAZAKI Tomohito, SOEJIMA Masakazu, UMEDA Mari)